VOL. 108
発行/2001年
7月1日

アルパック ニュースレター

ISSN 0918-1954

八瀬野外保育センター「ひいらぎの家」（本文中に関連記事があります）

目次 contents

・異業種交流から産業クラスター形成へ …… 2
・八瀬野外保育センター「ひいらぎの家」の改築工事が竣工しました …… 4
・酒蔵で金管五重奏と地酒を楽しむ …… 6
・地域づくりの新しい枠組みと自己点検 …… 8
・「市場再生」から地域協働のまちづくりに …… 10
・大江町二俣特定公共賃貸住宅が完成しました …… 11
・舗装、植栽(歩道一体利用部分)の整備に補助します …… 12
・韓国ソウル市の都市計画事情 …… 13
・メディア・ウォッチ …… 15
・まちかど …… 16

異業種交流から産業クラスター形成へ
―関西の都市融合型中小企業の自発的取組―

〔大阪事務所／重本　幸彦〕

見直される中小企業の役割

不況の中、大企業の雇用は伸び悩んでいる。やはり経営難に直面しているが、中小企業は日本経済を支えるとともに、雇用数で全産業（非第一次産業）の約80％、製造業の約75％を担っており（民営事業所。平成８年事業所・企業統計調査）、その面から中小企業への期待がある。

中小企業へ期待するもう一つの理由は、その技術力にある。最近、関西の中小企業を回ってみて改めて認識するのは、従業員数が数人規模の工場を含め現在まで生き残っている中小企業が持つ技術水準の高さや巧みさである。

特に中小企業の地・関西では、中小企業の優れた技術などを不況下でどう保全・継承するかが、いわゆる新規開業率の問題に負けず劣らず重要となっている。

図１　近畿圏大都市部の産業集積地と工業用地集中地

都市融合型中小企業が広がる関西内陸部

工業地帯というと、臨海コンビナート地帯を思い浮かべる方も多いと思う。

関西の例では、工業用地集中地（工業用地面積比50％以上）は、確かに大阪湾ベイエリア地域に並ぶ。しかし、実は製造業従業者密度が高い産業集積地（2,000人／km²以上）は、主に京阪神の都心を含む内陸部に広がっている（図１）。その多くは研究開発型の中小企業である。一部で住工混在となっているものの、その中で中小企業は事業所間の近接性、フェイス・ツー・フェイスの情報交換の容易性など多様な都市の有効性を活用し、いわば都市融合的に活動している。

大きく変わりつつある“地域産業組織”

高度成長期以前には中小企業の多くはいわゆる産地的に集積し連携していた（図２の(1)）。

しかし、高度成長のもとで、中小企業の多くは下請けとして大企業・大手商社の傘下に入り、大企業を頂点とした垂直統合的な地域産業組織が形成された（図２の(2)）。

そして今、大企業の海外生産やリストラなどにより、中小企業と大企業との関係が切れつつある（図2の(3)）。その際の問題点として、大企業からの受注減少とともに、下請け関係を通じて提供されてきた技術・情報・資金など、従来の大企業が果たしてきた中小企業支援機能が切れつつあることが挙げられる。

不況という現象の水面下での、大企業と中小企業との関係を巡る地域産業組織が構造的に変化していることに着目すべきである。

（「近畿圏大都市部における再編整備計画調査報告書 平成13年３月 経済産業省近畿経済産業局」から）

図2　地域産業組織の変容(「近畿圏大都市部における再編整備計画調査報告書 平成13年3月 経済産業省近畿経済産業局」から)

都市融合メリットを生かし産業クラスターへ

こうした中、中小企業の間で、互いのネットワーク化により従来は大企業などに依存してきた産業支援機能を自ら生み出す動きが始まっている。従来の異業種交流を発展させ、特定の商品群を中心に企画・受注・生産・販売などにわたって、公設試験研究機関・大学などと連携し中小企業ネットワーク組織を軸とした“地域産業クラスター（地域産業組織）”の形成へ向っている（図2の(4)）。

東大阪市のある地区では、中小企業経営者がなじみの喫茶店に集まり、世話役企業への受注をもとに企画や分業生産体制を調整し、各々の特技を生かし協力して生産・納品している。その関係は、元請けがピンはねする下請け型でなく、信頼に基づき仕事を紹介し合う横型関係といえる（喫茶「我路」を核とした中小企業グループ）。

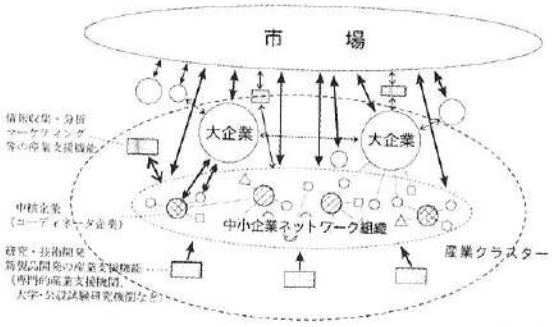


図3　産業クラスターのイメージ

さらに進んだ例では、東大阪市の中小企業が自主的に、新規創業・第二創業（二世経営者による経営革新）を対象に複数のコーディネータ（主に中小企業経営者）を集め、創業プランを評価、資金を含め民間ベースで創業支援をしている（(有)ロダン21）。

このように関西などでは、互いのコミュニティをベースに、産業クラスター（図3）形成へと、中小企業は歩み始めている。こうした中小企業の自律的態勢強化に加え、その産業環境を都市融合的特性がより発揮されるよう再整備するとともに、新しいライフスタイルを国民的に広げ、それに基づく需要創造と地域に根ざした中小企業とを結びつけることで、国内産業活性化への展望が切り拓かれると期待される。

八瀬野外保育センター「ひいらぎの家」の改築工事が竣工しました

〔京都事務所／前田　怜嗣〕

保育士研修会にて

八瀬野外保育センターは約30年前、京都市内の民間保育園の園長達の「こどもに、緑と土を」という思いをうけて命をあたえられました。現在、保育園園長達のボランティアによる八瀬野外保育センター運営委員会〔(社)京都市保育園連盟〕で運営されています。今回の設計も建設委員会、運営委員会の先生方と進められました。

八瀬という場所

センターのある場所は、市内から車で30分、叡山電鉄の八瀬駅から山道を15分程行ったところにあります。この町中から20～30分で山にたどり着けるというのが、京都の強みではないでしょうか。当地は、虚弱児対象の幼稚園、植物教材園、陸軍病院分室、浮浪者収容所、養護施設と数々の歴史をたどってきた場所です。

今回、工事を行った「ひいらぎの家」は、センターが開設される前からある建物で、オープン当初から、内部を改修して利用されてきました。改築にあたり、「ひいらぎの家」の名前を受け継ぎ、古い家にこもった「子供たちの香り」を失わないようにという願いを反映して設計しました。

利用想定

センターの先生方のお言葉をお借りすれば、今までのひいらぎの家は、「最も多目的、融通無碍に利用されてきたのがひいらぎの家ではなかったか、そこで、園児たちは、お弁当を食べ、午睡をし、囲炉裏を囲んで昔話を聞き、職員の炉辺閑話の研修に、落ち葉まつりの茶席にと利用されてきた」ということで、この機能の継承をし、1日の受け入れ総人数をチェックしながら、1日の受け入れ園を増やせるように、お泊まり保育も想定した室、子ども達の工作の場（道具をしまう場所）、調理、便所などの機能が想定されました。

建築計画

センターの門にたどり着くまで、こども達にとっては、かなり長い山道を上がってきます。そんな子ども達に、センターについたことが解るような視認性（といっても、既存の樹木の間から垣間見られる程度）を確保しました。今まで、大きな木々を頭上に見ながら歩いてきた訳ですが、建物の中に入った時に大きく視点を変えるように眼前に広がる空と、刻々と太陽の加減で姿を変えていく山々を見られる大きなデッキと一体になった部屋を用意しました。

断面的には、3層構成で、建物が上部に突出しないように深く沈め、各層へは、それぞれアプローチができるよう、1層部分は完全に独立できるように、内部階段からは、切り離しました。それに、3寸勾配の大屋根が、5本のV字型の腕木で支えられた構成となっています。大きな庇は、雨天時の待避場所としてまた、食事の場所、さらに山を借景とした舞台として利用できます。内装は、腰までは羽目板をし、

園庭よりひいらぎ家をみる

センターの先生の手作りの標本

壁、天井とも珪藻土の左官仕上げを行っています。ビニールクロスでない、手作業の感触と温もりを感じてもらえればと考えました。床は、素足で歩く時のなんともいえない、温かさを知っている私の一押しは無垢のフローリングでしたが、底冷えする場所ということもあり、蓄熱式の木質系床暖房を入れています。厨房関係は、キャンプの下準備も行われ、それらの備品も収納されることを考慮されています。

最後に

新しいひいらぎの家にも早速八瀬のサル軍団がやってきました。工事中にも時々やってきて職人さんの度肝をぬいたことが度々あるのですが、今回工事が終わったことを感じとって、人が誰もいない時に偵察にやってきた模様です。指詰め防止用の建具のゴムのパッキンを食べ物と間違って食いちぎったり、どうしても、建物の中に入りたかったのでしょうか、大きな建具を無理矢理開けて壊したりと4月はよくセンターから緊急コールがかかってきました（八瀬では、民家の冷蔵庫もかってに開けられて中身を食べられるそうですが）。今では、一通り、サルの検査も終り、そこまでの悪戯はないみたいですが、群がいくつかあるのでまだまだ心配です。

また、八瀬周辺で畑をやってられる方とも共通の悩みですが、イノシシや鹿がせっかく植えた苗木や木の芽の一部を食べてしまいました。ここでは、それでも残る植物を見守りましょうということで、しばらく経過を観察することとしました。

最後に、保育園の先生方は、イメージや工夫にあふれる方々です。建物の利用についても、「うーんすごい」という利用の仕方を考えられる先生もたくさんいらっしゃって、今後の展開が楽しみです。さらに、八瀬の自然がキープされ、子ども達の笑い声がとぎれない事を願い筆をおきます。

デッキ手摺は木製手摺りの内側にアルミのパンチングを貼っています

奥に見えるのがホール棟

まちなか市民国際博への実験
酒蔵で金管五重奏と地酒を楽しむ

〔名古屋事務所／尾関　利勝〕

聴衆を元気づけた酒蔵演奏会

「なぜか元気が出てくるね」という感想が聞こえる。始まる前とはうってかわった演奏会後の興奮、上気した聴衆達の顔に、世情の暗さを忘れさせる心地よく元気の出る一体感を感じた。そんなすばらしい演奏会を名古屋大曽根、金虎酒造の酒蔵で梅雨の晴れ間を縫って6月16日土曜の夜に開催した。

始まりはワーグナー協会例会での出会い

この企画はバイロイト音楽祭管弦楽団、日本人二人目の楽団員でトランペッターの武内安幸さんとの出会いからはじまる。3年前アルパック名古屋の会議室で開かれた名古屋事務所の小竹が会員になっているワーグナー協会例会に武内さんが講師で来られた。翌年は国立音大礒山先生、昨年は東工大山田先生など第一線のワーグナー研究者のお話を伺って、オペラには無頓着だった私にもワーグナーへの関心が多少芽生えてきた。

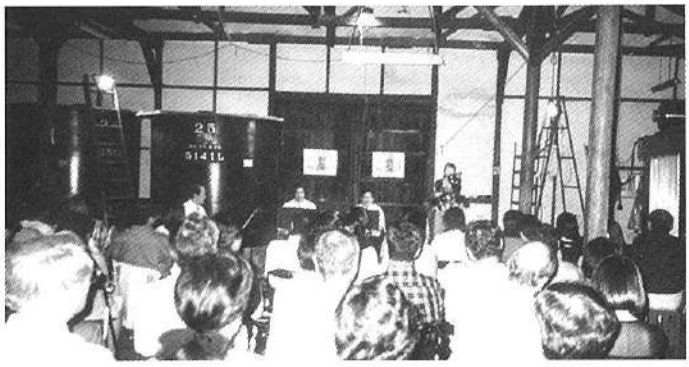
その武内さんが一昨年から愛知芸大音楽学部助教授に赴任、お付き合いが再開した。日本酒に造詣が深く、各地の地酒に詳しいことから名古屋の地酒をご紹介し、1月末、遅ればせの新世紀祝いがてら仲間達と地元大曽根金虎酒造の銘酒本丸御殿を一献傾ける内に酒蔵コンサートの企画が持ち上がった。

酒蔵で飲みながら気楽に企画

4月29日日曜日、恒例の酒蔵バーベキューに武内さんを現場確認がてらお誘いした。世界で活躍する演奏家に是非お会いしたいと名工大オケの学生達も参加。当初は武内さんのトランペットソロを考えていたが、伴奏用ピアノの調達が困難なことから金管五重奏をすることになった。もちろん武内さんのアイデアである。気楽な仲間達だからトントン拍子に話が進みプログラムと演奏家は武内さん、会場設営と聴衆は我々、手伝いは学生オケの連中、有料聴衆が50人集まれば酒に肴も用意できると、しごく簡単にまとまった。

ゆかいな喇叭（らっぱ）吹きの仲間達

5月29日(火)に「ゆかいな喇叭ふきの仲間達」という国内第一線のトランペッター4人のコンサートが名古屋伏見の電気文化会館であった。5年ほど続く会で東京、札幌、水戸などで開催、名古屋は今年が2回目になる。それに間に合わせて武内さんのプライベートブランドの酒を創ることになった。この演奏会はすばらしかった。奏者の一人、国立音大音楽学部長でトランペッター協会会長北村源三先生の透明感のある音色は聴衆を酔わせ、金管だ



けの演奏をはじめて聴く人にも深い感銘を与えた。もちろん演奏会後の二次会で金虎醸造の武内プライベートブランドが振る舞われたことはいうまでもない。

ふたを開けるまで未知数の参加者

この日はじめてチラシを用意して開催まで20日、誰に話しても大好評、とりわけ金管五重奏の評判が良いが申込のFAXがこない。

値段設定が悪かったのかと心配もしたが、金管五重奏に酒と肴は安いと言われて一安心。3日前ようやく50人に達しそうな感触を得た。酒は蔵元だから有り余るほどあるが、確定しないと困るのは客席設定と肴の準備。酒蔵にあるのは15脚、仲間の貸し物業、近藤産興・青木さんに椅子を50脚借りる事にして、足りない時は酒のケースを裏返したいつもの即席椅子を用意することにした。

開けてびっくり、超満員

前当日は建築家協会東海支部大会で準備できず、前夜に事務所で確認すると70人を超える様子。当日朝には更に増える勢い。とり急ぎ参加者名簿を金虎にFAXしてJIAと義兄の山路曜生作舞リサイタルに顔を出して現場に駆けつけたのが開会2時間前、奏者はゲネプロの真っ最中。並行して照明を調整し、客席配置を確認、ビデオをセットしたところでようやく準備万端間に合った。結局参加者は大人と学生で有料73人、手伝いや関係者約20人で100人近くになった。即席椅子を含めて客席はぎりぎり、嬉しい誤算である。

酒蔵がコンサートホールに変身

酒蔵とはいえ音響効果のよくない木造トラス工場。景気の良い時は満タンの酒樽が空。これが共鳴して思いの外、響きがよい。あたかもヨーロッパの田舎の小さな教会ほどの大きさも手頃、奏者の息づかいが間近に感じられるアットホームなコンサートになった。

金管音楽の世界を演奏と解説で楽しむ

バロック風宮殿音楽会を想わせるムーレの「ファンファーレ」で幕開け。編成は金管アンサンブル最少構成、トランペット2、トロンボーン、ホルン、チューバの5管、GOLDEN TIGER BRAS QUINTET。100年前の貴重な楽器も登場。それぞれ武内安幸、藤島謙治(名古屋フィル)、駒井小百合(東京フィル)、野々口義典(名古屋フィル)、安元弘行(愛知芸大音楽学部長)。そうそうたる奏者だから演奏は確か。続いて英国ヘンリー8世「棘の無いバラ」、19世紀ノルウェー、グリーグ「組曲」、そして結婚予定の金虎酒造ご子息を祝う曲で第一部が終了。

休憩はオペラハウスにまねて会場外の酒とつまみで歓談の後、第二部開演。曲目はヨーロッパ民謡のアメージング・グレイス、グローリー・ルックアウェー、ロジャー「サウンドオブミュージック」から3曲、第一部と同様に武内さんの解説で軽快に進行、アンコールはメサイアのコーラスを組み込んだ編曲の「聖者の行進」で盛り上がり演奏会を終了、奏者と聴衆がコミュニケーションする地酒金虎を親しむ宴に移った。開会前とはうってかわり、聴衆の顔がさわやかに明るく輝いている。つくづくよい音楽が持つ力を感じざるを得なかった。早くも次ぎの企画をとアンコールの声。この調子で「まちなか市民国際博」を実現させようと目論んでいる。

地域づくりの新しい枠組みと自己点検

〔大阪事務所／小阪　昌裕〕

地域の連携が課題

少子高齢化が進む中で、地域の活性化をどのように進めていくかが大きなテーマとなっています。その中で、交通条件や情報手段の向上により諸々の圏域が拡大しています。そこで、自治体や商工会等の個々の取り組みも大事にしながら、さらに複数の地域主体同士が補ぎない、力を合わせればさらに活性化に効果があるのではないか。特に、広域連携に取り組むことが地域活性化に重要ではないかと考えます。

今回は、多自然居住地域に焦点を当てて、その地域内外（京阪神等の大都市圏）との連携にどのように取り組んでいるのかを、近畿圏の事例を紹介しながら考えてみます。

多自然居住地域と大都市圏の連携

多自然居住地域とは何か。この概念は、「21世紀の国土のグランドデザイン」で提示されています。豊かな自然に恵まれた地域で、都市的なサービスとゆとりある居住環境をあわせもつ自立的な圏域です。人口が大都市圏に集まる中で、大都市圏以外の地域で、安心して住み、働き、楽しみ、学ぶ生活ができるような地域づくりをめざしています。

多自然居住地域は、担い手不足など地域づくりのための事業の主体力の面で多くの課題を抱えているものの、地域のポテンシャルには優れたものがあります。特に豊かな自然環境や景観、活動の場や農林漁業など地域の特性を生かした生業の取り組み、生活文化、歴史資源など、魅力ある地域商品を構成する素材のポテンシャルを持っています。

まず、行動テーマありき

広域的な連携組織の立ち上げ期の状況を、今までに関わった近畿圏内の多自然居住地域内の3つの事例を取り上げて紹介します。

まず、連携の行動テーマの着目点は、高野山は、高野山という共通資源に着目し、民間の視点から誘客を図り、商工業振興につなげることです。奥熊野は、公的宿泊施設の経営の安定化を図るため、誘客事業やPR等を共同で実施しています。但馬は、“但馬理想の都の祭典”で得たノウハウを、地域のポテンシャルを維持するために関係者を組織化しています。

事業メニューをしぼる

メニューは、高野山は、高野山の文化遺産を活用した商品化。奥熊野は、温泉を活用したもてなしや自然体験ツアー等のメニューを生かした公的宿泊施設等のネットワーク化。但馬は、情報発信、人材育成、自然等の研究などを通して官民のパートナーシップ化にしぼっています。

事業の目的は地域活性化を意識

目的は、高野山は、交流人口の増加と地域資源を活用した受け入れ体制づくりによる地域産業の活性化を図ること。奥熊野は、観光客増加による地域経済の活性化(外資獲得)を図り、

	高野山（和歌山県）	奥熊野（和歌山県系）	但　馬（兵庫県）
取り組みの必要性	共通資源（高野山，マンダラ）に着目し，民間（商工会等）の視点から誘客を図り，商工業振興につなげる	公的宿泊施設の経営の安定化を図るため，広域で受け入れ体制の水準アップと統一化のリフト展開を進める	ポスト理想の都の祭典事業として関係者を組織化し，地域の主体的な取り組みとする
地域商品化のテーマ	歴史・文化資源の活用による地域間ネットワーク（文化遺産を活用した商品化）	公的宿泊施設等のネットワーク化（もてなし・体験ツアーの企画）	官民のパートナーシップ化の誘導による複合主体形成（PR・研究）
趣旨・目的	交流人口の増加と，地域資源を活用した受け皿づくりによる地域産業の活性化を図る	来訪者への商品提供による，観光客増加をめざし地域経済の活性化（外資獲得）を図る	地域の人材養成，都市との交流を図るイベントを実施し，来訪者の増加を図る
方法	散策路網（マンダラストーン）による広域圏をつくる	2泊3日の地域内連泊の商品化をし，広域の施設を共同利用して，誘客する	受け入れ体制の水準を確保するため，住民の研修参加を実施する

表1：各事例の立ち上げ期の状況

	事業推進の留意事項	チェック事項		評価欄（自己点検）
A	地域連携事業の企画、合意、立ち上げ	(1)	事業の全体像づくり	
		(2)	関係者の合意形成	
B	地域のニーズを活用した地域商品づくりと商品購入者の市場（ニーズ）対応	(3)	地域商品づくり（連携商品）	
		(4)	市場ニーズの把握	
C	地域連携事業主体となる事業組織づくり	(5)	事業の役割分担と事業組織の立ち上げ	
		(6)	事業推進体制	
D	地域連携事業の運営、経営と事業の継続性の確保	(7)	事業経営と事業収支の確保	
		(8)	持続性・継続性の担保	
E	連携地域の地域内の支援体制の構築（官民パートナーシップ）	(9)	支援、協力、活用の組織化	
F	連携事業から地域活性化（波及）への寄与	(10)	地域における関連事業の企画と展開	

評価方法：○：できている
△：部分的にできている（準備中である）
×：全く取り組んでいない

表2：連携事業推進の留意事項、チェック項目

地域内住民の雇用・就業の場を創出し、地域の産業をバックアップする体制をつくること。但馬は、地域の人材づくり、交流を図るイベントを実施して来訪者の増加を図ることです。

施策は具体的なものに

施策は、高野山は、既存資源や新設資源を結ぶ散策路の設定と活用によるマンダラをテーマとした広域圏を形成すること。奥熊野は、複数の公的宿泊施設に宿泊する2泊3日の旅行の商品化をし、地域内の広域利用圏をつくること。但馬は、地域特有の資源という共通テーマを選定し、広域圏を形成し、受け入れ体制の水準を確保するための住民の研修やイベント等の開催を広域で実施することです。

新しい発想が地域を変える

以上より新発想による地域の活性化のためには、

(1)広い視点で、従来の枠を越える

(2)地域資源を再発見し、組み合わせる

(3)新しい“システム化”“しくみ化”にチャレンジする

の3が重要であるといえそうです。

第1は、従来の行政境界や団体等の枠を乗り越え、テーマを重視してそれを実現するための広い視点です。第2は、人材も含め今ある地域の資源を外からの客観的な視点や新しい視点も加え、それらを組み合わせていくことです。第3は、具体的に動かしていくシステムやしくみを、従来のものにとらわれず、一面では楽しく簡略化していくことです。

自己診断からスタート

連携事業の進展状況に応じて自己診断が可能です。○印がC-(5)まで付けばスタート可能、D-(7)まででは実施中、D-(8)やE-(9)、E-(10)まででは波及効果が出てきている状況を示します。

以上の詳しい内容は、「地域づくりと連携」（平成13年5月発行：総合研究開発機構、地方シンクタンク協議会）の「地域活性化と魅力向上を目的とした広域圏形成方針に関する考察」に掲載されています。コピー提供いたしますので、ご一報ください。

「市場再生」から地域協働のまちづくりに
ー上坂部三丁目地区優良建築物等整備事業が完了ー

〔大阪事務所／馬場　正哲〕

この3月14日、尼崎市の北東部、四方を北は阪急神戸線、西はJR福知山線、東は新幹線、南は名神高速道路に囲まれた約170haの中央部である上坂部に「コープこうべ」を核とする専門店街「フラップ21」と376戸の住宅「フレアージュ塚口」が竣工しました。

郊外「市場」の立地と盛衰

かつては一面の田園地帯でしたが、阪鶴鉄道（現JR福知山線）の開通による工場群の進出とともに社宅などによる住宅地化が進み、バス停があったこの地にお店ができはじめ、昭和33年に上坂部市場が開設されて以来地域の生活サービス機能を担ってきました。

しかし、近年、高齢・少子化など人口減少とともに、阪急塚口や園田といった駅前商業地区の発展や南部の幹線道路沿道での大型量販店の進出など、商業環境が悪化する中、市場は開業40年を経過し、自身の近代化の遅れと施設老朽化がこれに拍車をかけ、拠点としての魅力と活力の再生か衰亡かが、市場のみならず地域の課題となっていました。

「近松の里」づくりとともに

一方、当地区東の小園土地区画整理事業が、昭和60年に完了。JR福知山線の複線電化と東西線の開通によって、最寄りJR塚口駅（当地区より約700ｍ西）から都心部へ約30分と格段の利便性向上など、立地環境の好転を活かし、より良好な住環境形成と活力ある土地利用の推進も期待されるところとなりました。

また、市制70周年記念事業で、地区の南の近松門左衛門縁の広済寺を中心に「近松の里」として位置づけ、歴史文化都市尼崎の新しい顔としての整備も進められました。

当市場・商店街でも、地域間競争で疲弊する商業の活性化に向け、近松門左衛門縁のまちの歴史文化性に根ざし、地域の個性を育むまちづくりに取り組むこととし、商店街通り「近松ロード」整備や、地域から発信する「ハヘホ文化村」の活動などを続けてきました。

市場再生からまちづくりへ

この“まちづくり実践”を踏まえ、いよいよ「市場再生」の検討がスタート。市の商業課の指導を受ける中、高齢や後継者難など自力再建の困難性とともに、施設が今後の地域の商業サービスに規模として間に合わないことから、市場単独での再開発事業を断念し、周辺と協調したまちづくりが出来ないか、協議を重ねた結果、市場と隣接地の森永製菓社宅及び地権者などが「まちづくり協議会」を結成し、商業活性化に合わせた住宅供給などによるまちづくりを地元主導の共同事業によって推進することとなりました。

これにより、交差点角地のまとまった街区（約１ha）を形成し、現状の商業機能とともに、圏域の中心的な位置ポテンシャルと沿道立地の条件を活かした新たな地域サービスゾーンの形成を計画的に誘導し得る条件が整いました。また、当市場周辺地区の木造家屋密集や狭隘道路など防災上の課題や交差点改良とともに、阪神・淡路大震災による被災建物の復興なども整備の目標となりました。

地域と事業協力者と行政の協働

今般、社会経済環境の厳しい中、地域からのまちづくりへ、行政や専門家の支援とともに事業協力者の参画が事業推進、事業の担保性にとって重要です。地元は、市の支援と専門家派遣を受けて、事業コンペにより、藤和不動産

㈱をパートナーとして決定し、ディベロッパーを依頼することとしました。

一方で市は、再開発方針に位置づけられていない地区でもあり、法定再開発事業でなく任意の事業である「優良建築物等整備事業制度」を摘要することとし、総合計画の実施計画で位置づけを行い、開発課を窓口として、事業の具体的な推進支援に着手しました。

都市計画を要請

補助採択にあたって県などによって指摘された点は、事業の規模が大きいにもかかわらず市の再開発方針や都市計画マスタープランに位置づけられていない点など、震災復興事業に取り組む困難な財政事情の中、本地区で補助金を注ぎ込むことの必要性や効果が厳しく問われました。

また、現況用途地域では、敷地の過半が第1種住居地域で（市場等が近隣商業地域）、店舗規模や容積等が制限され、市場再生の切り札である「核的商業施設」の導入や一体整備が困難なため、地権者全員同意の一体的事業の下に、「地区計画」の決定と「用途地域の変更」など都市計画を要請しました。

市民事業の重要性と限界

尼崎市では、この他「環境アセスメント」が義務付けられ、「開発申請・協議」「建築確認申請」、管理者協議、警察協議、近隣協議等々、これら複雑な手続きが手順を追って同時に解決しなければ、全ての手続きが完結しません。法定再開発でない任意の事業の困難性をつくづく感じさせられましたが、地元主導の事業を市が高く評価し、支援いただいたお陰で乗り切ることが出来たといえます。

今後、地方分権、市民主体の流れの中で、市民主導のまちづくり事業が益々重要となってきます。これらを支える行政や様々な「専門家」などとの協働の方法とともに、計画段階の協働や誘導、リスクマネージメントなどトータルな仕組みづくりが急務であることを実感しました。

きんきょう 『近況報告！』

大江町二俣特定公共賃貸住宅が完成しました

〔京都事務所／中嶋　秀介〕

大江町二俣地区（京都府）では人口の減少、少子高齢化が著しく、地元からは、定住促進、とりわけ若年層世帯のUターン、J・Iターンの受け皿として、公共住宅建設の強い要望がありました。町では既に、定住のための一時的研修体験施設「鬼のUターン広場」（住宅）の整備をはじめ、「大江町若者定住推進条例」により町外からの転入定住者に条件付きで定住奨励金を交付する制度等があり、積極的な定住促進政策に取り組んでいました。

今回の一般公募では全12戸の募集に対し、若年世帯を中心にほぼ2倍の応募がありました。内訳では、福知山市や綾部市等の近隣市町村をはじめ京都市都市圏からの応募もあり、これらの数が町内応募を超えるかたちになりました。3月末より入居開始、まちびらきを兼ねた竣工式が行われました。

二俣住宅では、若年層世帯が徐々に地域に馴染んでいけるよう様々な工夫を試みました。

(1) 1階を玄関とするメゾネット形式とし、専用アプローチとセミパブリックな庭を有する接

東下りの斜面地に2棟を南面配置しました
土壁風テクスチャーをもつ妻壁

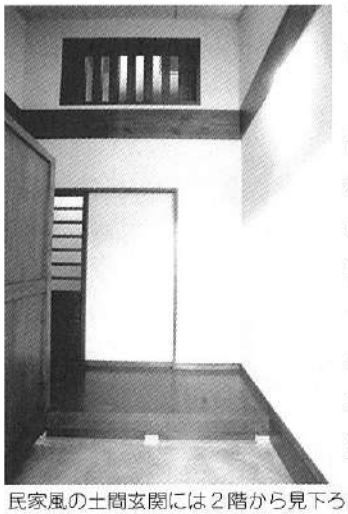
地性のある住戸で、戸建感覚に近い住環境を持っています。その集合体としてのコミュニティ環境、とくに子供の遊び場としてゆとりのある住棟間広場を整備しています。

(2)玄関は充分に空間的広がりをもたせた民家風玄関とし、式台から接客空間に直接つながる平面計画や、吹抜け、無双窓を通して2階とのつながりも持たせています。また、玄関横の居室は掃き出し窓とし、縁側コミュニティを形成することもできます。

(3)住戸内で南北にならぶ居室間の間仕切りは引き違いの建具で構成し、住戸内の風の通り抜けをつくるなど、良好な住環境の創出に努めています。また、居室は建具の移動や家具の配置により、続き間としたり広さを変えられるなど、家族の成長に合わせて間取りをつくる可変性をもっています。

(4)建物の外観は、4寸勾配の瓦葺き屋根が折り重なるように連続し、住棟のボリューム感を和らげ、また、妻壁は土蔵土壁風に仕上げ周囲の風景になじむよう配慮しています。

12戸の入居世帯には小学校中学年の男の子を筆頭に下は0才の乳幼児まで、幼い子供たちがたくさんいます。住環境は子供たちの情操教育の上で大変重要な部分を占めると考えています。狭小な個室にこだわらず吹抜けや続き間など様々な住空間の提案、遊びの空間、装置など、押しつけにならないようなアイデアを盛り込んでいくことを心し、設計しました。岩組み広場や遊具には、団地外から遊びに来る子供たちもみられます。この二俣住宅に子供たちの笑い声や泣き声がにぎやかに響く様子が、私にとって一番の喜びでした。



民家風の土間玄関には2階から見下ろす無双窓をうがつ

舗装、植栽（歩道一体利用部分）の整備に補助します－那覇新都心地区－

〔大阪事務所／馬詰　建〕

那覇新都心地区における歩道一体利用のセットバック部分の舗装材・植栽への補助というユニークな取り組みについて報告したいと思います。

那覇新都心地区の取り組み

那覇新都心地区では、沖縄における先導的なまちづくりが進められており、平成4年に土地区画整理事業に着手し、平成9年には用途地域指定や地区計画等の決定、平成11年には「シビックコア地区整備計画」の建設省承認を得ています。

都市再生総合整備事業を利用した取り組み

那覇市では平成12年10月に「那覇新都心地区都市拠点整備総合計画」を策定し、これに基づき、魅力ある街並み形成や拠点性を高めるさまざまな施設を「都市再生総合整備事業(拠点整備型)*」により整備しようとしています。

*旧「街並み・まちづくり総合支援事業」

那覇新都心における歩道一体利用の事例（植栽については整備されていない。また隣接地は空き地のまま）

「都市再生総合整備事業」は基幹事業の土地区画整理事業等では整備できない施設を補助対象とするニッチ（すきま）型の事業です。

通常は土地区画整理事業や市街地再開発事業などとあわせて、人工地盤や情報・防災施設などの整備に利用されることが多いのですが、那覇市ではこの事業を民有地への歩道一体利用部分への補助に適用しようとしているところが特徴的です。

補助内容は

那覇市では、本年度は、歩道一体利用部分の舗装材と植栽について、整備費の2/3以内を限度に補助を行う予定にしています。原則的には前面歩道と同レベルの舗装材（せっき質や磁器質系等）や植栽とすることが条件となっています。

歩道一体利用とは、セットバック（壁面後退）を行った部分を歩道と一体的に利用することにより、個性豊かな街並みやにぎわいとゆとりある歩行者空間を生み出すことです。

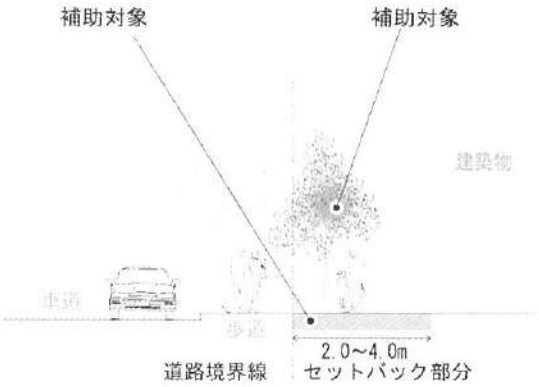
とくに、民有地の歩道一体利用に対して補助を行うことで、地区計画で定められた壁面後退を行うだけでなく、連続的で景観的にも統一のとれた豊かな歩行者空間の整備を図ろうとしています。

今後の課題

現在、那覇市では補助要綱や体制などの詳細を検討しているところですが、事業の課題としては、次のような点があります。

(1)補助対象が民間でかつ個別の敷地であるために、どれほどの申請＝事業量かを把握するのが困難である。(2)また、それが線的ではなくて、個別（バラバラ）の敷地で申請が出る可能性がある。

国の年度ごとの補助制度に乗りながら、民間の意欲を引き出し、かつ、その事業量を把握・コントロールすることは非常に難しい取り組みです。



このため、PRや周知などを行うとともに、事前にどれだけの事業量が発生するかを把握するためのアンケート実施や事前申し込みなどの手続きを整える必要があります。また、個別（バラバラ）敷地の申請や取り組みが多い場合、ないよりもよいのですが、景観や歩道一体利用という観点からは、施策効果としてはどうかということにもなります。

今後の施策運用について、さらに検討を続けていく必要があります。

韓国ソウル市の都市計画事情

〔大阪事務所／高田　剛司〕

前号（VOL.107）の「韓国ソウル市の交通事情」（澤田記）に引き続き、ソウル市の都市計画に関する最新動向についてお伝えします。

1980年代後半からの開発ブームによる弊害

ソウルの近代的な住宅といえば、整然と並んだ高層住宅が印象的です。1990年代には、ソウル市のベッドタウンとして、グリーンベルト外側に複数のニュータウンが建設され、ソウル都市圏の拡大が進みました。

一方、1988年のソウルオリンピックを契機に、活発に再開発が進むソウル市内では、1990年12月に一般住居地域における容積率400%

までの規制緩和が行われたことで、既成市街地内での高層住宅の建設が加速しました。そのため、住環境の悪化（日照、眺望、通風など）、都市景観や自然環境の破壊、都市基盤施設への過大負荷（上下水道、電気、道路など）などが問題になってきました。

高層住宅の建設ブームは、開発業者や地権者の旨味のある事業として、工場跡地が次々に高層住宅に用途変換されるという事態も招きました。

量から質の時代へ

1990年代後半、韓国は深刻な経済危機に陥り、1997年末にIMFの管理下に入って以降、都市政策・都市計画の面でも、これまでの量的供給重視から、都市景観や住環境の質的向上をめざす方向に大きく転換しつつあります。具体的には、一般住居地域（ゾーニング）の細分化のための検討や、容積率の切り下げ実施、丘陵地における高さ制限や大規模開発抑制などが取り組まれるようになってきています。

環境との共生をめざしたまちづくり

ソウル市役所では、都市計画課内に「都市生態チーム」をつくり、1999年から2000年にかけてソウル市内の生態系調査を実施しました。今後は、それらの調査データを都市計画に反映させ、環境との共生をめざしたまちづくりが進められることになります。

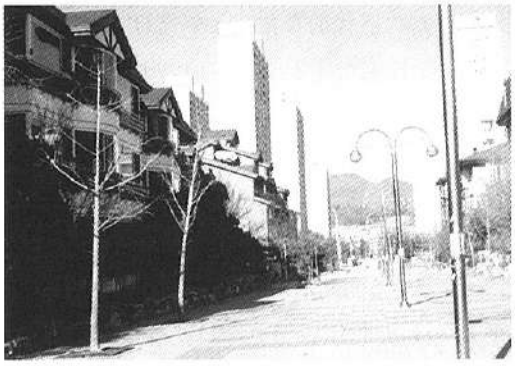
住民参加のまちづくり

韓国初の自治体まちづくり条例として、「ソウル市都市計画条例」が2000年7月に制定されました。また、1990年代から進む地方自治の拡大を背景に、地区計画を市内200箇所で指定し、より地域に密着した計画づくりを進めようとしています。地域密着のまちづくりには住民参加が欠かせませんが、現段階ではコミュニティ・リーダーが不足しており、当面は既存の市民団体と行政が一緒に取り組む中で、少しずつ住民参加のまちづくりを進めていこうとしています。

都市計画分野における個人レベルでの交流を

今回、ご紹介した「住環境の向上」「環境との共生」「住民参加のまちづくり」以外にも、ソウル市の将来的な課題として、「高齢化社会への対応」や「都市の安全な暮らし」などが挙げられています。これらは、いずれも日本で重視されているテーマであり、今後は、私自身も含めて、個人レベルでの日韓交流をもっと活溌にし、共通の課題解決に結びつけていきたいと思います。

最後に、今回の視察で、韓国側の多くの専門家をご紹介していただいた関西大学の安部誠治先生をはじめ、ヒアリングに応じてくださったソウル市政開発研究院（SDI）、ソウル市役所都市計画課、交通環境研究所（TERI）の方々に紙面を借りて御礼申し上げます。



計画的に整備されたニュータウン

失われつつある農村風景

紹介者／名古屋事務所　早川　周

「コミュニティ・ビジネス」
○ 細内　信孝　著
○ 中央大学出版部

中小企業は多種多様な企業から成り立っており、最近話題にされるコミュニティ・ビジネスも中小企業の一つの形態といえる。本書（1999年10月刊）は、そのコミュニティ・ビジネスについて、その考え方を整理するとともに、国内外の具体的事例を集め、紹介した著作であり、専門書であるが、表紙の装丁も含めてとっつきやすく、用語解説もあって読みやすいものとなっている。

著者は、民間の調査研究機関等の勤務を経て1994年より(株)ヒューマンルネッサンス研究所主任研究員であり、コミュニティ・ビジネスの研究者であると同時に日本における本格的なインターミディアリー（非営利組織を後方から支援する非営利の民間支援機関。NPOのNPO）を目指して設立されたコミュニティ・ビジネス・ネットワーク（CBN）に参加し、自らが現実社会のなかで、実際に活動を起こしていくことで、新しい知識、ノウハウを創造している実践家でもある。著者によれば、コミュニティ・ビジネスとは、地域住民がよい意味で企業的経営感覚をもち、生活者と意識と市民意識のもとに活動する「地域主体の地域事業」である。

コミュニティ・ビジネスという言葉を初めて聞く人は、そのイメージがなかなかつかみにくいかも知れない。著者も本書の中で、コミュニティ・ビジネスを最初に提唱した頃、コミュニティとビジネスの結びつき、行政との役割区分などの点から他の人の理解が得にくかったと述懐している。

読者は著者のさまざまな角度からのコミュニティ・ビジネスの分析・整理と（有）すみだリバーサイドネットワーク（東京都墨田区）、(株)黒壁（滋賀県長浜市）など日本の事例や地域交換取引システムや住民主導のまちづくり会社を含む英国スコットランドのコミュニティ・ビジネス運動の紹介を通じ、著者の主張するコミュニティ・ビジネスのイメージを得ることができる。

21世紀を迎え、新しい社会経済システムの枠組みが求められている今、企業社会や市場経済機構に代わるコミュニティ・ビジネスはその一つの要素となる可能性を持っている。このような著作がコミュニティ・ビジネスの理解を深め、また、新たな実践事例が積み重なることにより、コミュニティ・ビジネスがわが国の経済社会に定着する日が来るものと思われる。

まちかど　ガリバーマップからウォークラリーへ

〔大阪事務所／中塚　一〕

駅前に突如現われた「ガリバーマップ」

突如としてＪＲ富木駅前に現われたタタミ６畳分の「ガリバーマップ」。これは、５月に高石市で行われた「富木・花咲き、まち咲きまつり」でお披露目された地元子ども会の「まち咲き探検隊」による「まち咲きマップ」です。

見て歩いて再発見いつものまちがおもしろい

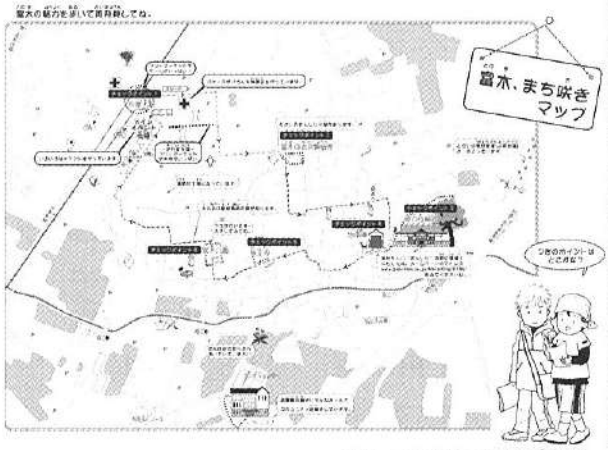
古くからの集落である富木は、迷路のような路地空間と神社、寺、地車庫、古い街並み、川等にネコや犬、さらにはうさぎ等もいる子ども達のワンダーランドです。このフィールドを生かし第３回高石楽市楽座のプレイベントとして、地元自治会や子ども会等と連携した「まち歩き」から「ガリバーマップづくり」、さらに「まち咲き（まちの宝）」を活用した「ウォークラリー」へと展開していきました。

まちの歴史クイズとウォークラリー

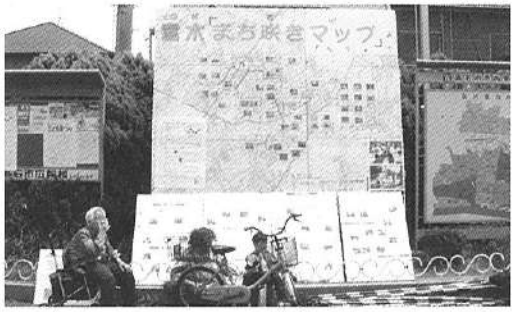
「ウォークラリー」は、まちの中に設定した６つのポイントをクイズに答えながら回ってもらい、富木のまちを知ってもらおうという地域の資源を生かした地域の様々な方々の協働による試みです。当日は、イベント全体で約3,000人の方々が参加し、その内の約200人の方々が実際にまちの中を散策されました。

おとなバージョンへ

子ども達の「まち歩き」から始まった今回の試みは、７月には、さらに「まち咲き探検隊（おとなバージョン）」へと展開しています。



ウォークラリーにいざ出発



写真上：駅前にガリバーマップが登場
中：　多彩なイベントが目白押し
下：　まち咲きがここにあったよ

アルパック（株）地域計画建築研究所

・本　　社　　URL:http://www.arpak.co.jp　E-mail:info@arpak.co.jp
京都事務所　〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
・大阪事務所　〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
・名古屋事務所　〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
・東京事務所　〒160-0011東京都新宿区若葉1-1・YTビル2F/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
・九州事務所　(株)よかネット　〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハピエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673